



第 97 号

公益財団法人 黒田奨学会

「袖振り合うも多生の縁」

北海道標津町国民健康保険 標津病院 病院長 大野 高 義

皆様、初めまして。私は現在、北海道の道東にある^{しべつちょう}標津町の病院に勤務しております大野と申します。

この度、歴史ある瑞藤会会報に寄稿させて頂く機会を頂き、総裁黒田家第十六代当主黒田長高公をはじめ、理事長伊達健太郎様ほか、多くの理事・監事・評議員の皆様にご心より感謝申し上げます。



私自身、昭和55年から昭和61年まで奨学生としてお世話になりましたが、母や娘たちも含めて親子三代に渡り瑞藤会会員であり、とても光栄な事と感謝しております。また、私の父方、母方ともに祖先より連綿と続く黒田家との深いご縁があったことより今回の機会を賜ったものと考え、僭越ながら寄稿文としてご紹介させていただきます。（以下、敬称略）

1) 大野小弁正重（父：大野正敏 方の先祖）

父方で歴史上名を残したのは、2014年のNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の中で「^{きいたに}城井谷の悲劇（第37話）」で俳優辻本祐樹さんが演じた、黒田官兵衛の嫡男である黒田長政の侍大将として活躍した大野小弁正重です。

天正14年（1586年）豊臣秀吉が島津氏勢を攻めた九州平定の後、黒田官兵衛は豊前六郡の領地を拝領しましたが、秀吉から伊予国（現在の愛媛県）への領地替えを命ぜられた前領主の城井谷城主^{うつのみやしげふさ}宇都宮鎮房（別名城井鎮房^{きいしげふさ}）は、一旦は領地を明け渡しましたが、後に反旗を翻し城井谷城や大平城などを奪還しました。

黒田長政は、この反逆行為に対して宇都宮討伐を父官兵衛へ願い出ましたが、体制が整っていないことから官兵衛は宇都宮討伐を許可しませんでした。天正15年（1587年）10月9日長政は兵二千に毛利勢の援軍を加え城井谷攻撃を敢行しました。（第一次・城井谷の戦い）

この戦いでは、先手大野小弁正重、二番手勝間田彦六左衛門重晴、三番手黒田長政の順で攻め入りましたが、小山田城付近で宇都宮勢の挟撃・急襲を受けたため、体制を立て直すことができず黒田軍全体が崩壊し敗走した際に宇都宮勢から激しい追撃を受けました。

窮地に陥った主君を守るため、大野小弁正重は黒田長政から総大将の陣羽織を賜り、身代わりとして敵陣に切り込み壮絶な討死となりました。（享年18歳）

この戦いで黒田勢は八百余名の死者を出し黒田長政は九死に一生を得ましたが、この古戦場跡地は現在も福岡県築上町岩丸の山中に「大野小弁正重墓碑」として石碑が建てられ「小弁殿（こべんど）」として今も地元の方々に守られております。

便利な時代になり、グーグルマップで「大野小弁正重墓碑」で検索して頂ければ、すぐに地図上

の位置とともに、墓碑の写真や町教育委員会設置の説明看板等を見ることが出来ますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。

長らく黒田家の家臣としてお仕えた大野家ですが、昭和二十年（1945年）6月19日～20日の福岡大空襲にて大野本家家屋が焼失し、家系図などの記録を含めすべての家財が失われてしまいました。私の祖父が終戦時に朝鮮総督府が所轄する税関長をしており、父は京城医学専門学校の医学生であったため戦禍から逃れることができ、すべての家財を打ち捨てて家族で朝鮮からの引き上げてくる際に、寝具にくるんでかろうじて持ち帰ることができた家伝の江戸時代中期（1641～1693）の肥前刀が黒田家家臣の証となっております。

また、福岡へ引き上げてきた大野家が、母方の梅崎家と共通の親戚である小藤円太伯父を通じて梅崎家の部屋を借りに来たことが、父と母の出会いとなったこともご縁の深さを感じる出来事でございます。



大野小弁正重墓碑
(右：父 正敏 左：祖父 敏明)

2) 佐竹小左衛門義隆さたけ こ ざ えもんよし隆 (母：満壽子みちのくに(旧姓梅崎) 方の先祖)

母方は家系図が残っており常陸国の佐竹氏から始まり、最初は三木城主の別所長治の一族として二百石を領していた佐竹小左衛門義隆です。天正八年（1580年）三木城が豊臣秀吉によって攻められ落城し、生き残った小左衛門が藤井性を名乗り、後に黒田孝高（官兵衛）に相談役として抱えられ、豊前中津を経て、黒田家の筑前福岡への国替えにより大名町に移り住み、以後代々藩の客分として家禄を食むこととなったことが、黒田家とのご縁となりました。

黒田藩や福岡の歴史上で名前が挙がる人物としては、佐竹矩一さたけのりかず、梅崎忠太泰一うめざきちゅうたやすかず、佐竹小太郎さたけ こ たろう、藤井種太郎等ふじいたねたろうが挙げられます。

佐竹矩一は文化九年（1812年）藩庁に出仕勤務後、明治維新にて福岡県公吏となり、旧藩の軍艦明神丸を詐取した米商人クラークが佐渡港まで逃げたところを、佐渡にて談判して明治三年に無事に軍艦を取り戻して帰福しています。

梅崎忠太泰一は佐竹清次の末子として生まれ梅崎家を継ぎ、棒術の新当夢想流の免許皆伝で、弟子も多数いたそうです。黒田藩の軍艦購入に際しては江戸と長崎を奔走し、藩公より覚えめでたく大名町から春吉一番地に新居を建て移り住んでいます。

佐竹小太郎（政親）は梅崎泰一の長男として生まれ、後に佐竹の本姓を受け継ぎましたが、明治維新の混乱期に生じたいわゆる「藩札事件」に巻き込まれました。その当時藩札はほかの藩県でも公然と使用されていた状況でしたが、時の政府が県令黒田長知候へ厳しく責任追及したことで、結果旧臣達はその責をとり小太郎も終身遠流となり肥前五島に島流しとなりました。のちに明治十五年大赦により許されて、小学校教員となっています。

藤井種太郎は藤井鹿次郎の長男として明治五年に生まれ、明治十八年玄洋社に入りました。その仕事ぶりから頭山満と親子の契りを結び、後援を受け明治二十三年慶応義塾に学びましたが、明治二十七年に日清戦争が起こると、軍に従い韓国、満州を奔走しこれが大陸と結びつく機縁となりました。

終戦後、一時帰国し筑豊の平垣炭鉱に務めていましたが、日露戦争が起こると陸軍通訳として明治三十七年義軍本部の親衛第一隊長となって露軍の後方攪乱攻撃を行い日本軍の勝利に貢献し、帰国後は玄洋社の幹事として経営に尽力しましたが、大正三年四十九歳の志道半ばで他界しております。

3) 黒田家浜の町御別邸と梅崎家

黒田奨学会とのご縁は、梅崎忠太泰一の三男で梅崎家を継いだ梅崎大三郎の次女、梅崎キヨの入婿の梅崎（旧姓木村）亮吾が、黒田侯爵家家扶として大正二年から黒田家浜の町御別邸内の居宅に移り住んだ事から始まりました。

私の母も含め梅崎家の子供たちも、昭和二十年の福岡大空襲で御別邸が焼失するまでの二十年間余り、御別邸内の梅崎家居宅で暮らしており、黒田奨学会発足後の一時期は黒田家浜の町御別邸が奨学会事務局になっておりました。

御別邸で、常日頃より父亮吾から「お前たちが健やかに日々を送れたのも、皆黒田様のお陰で、ご恩を忘れてはならぬ」と言い聞かされていた母も齢を重ね、月日の流れとともに昔の古い記録も次第に失われ、御別邸内の出来事やその当時の奨学会、奨学生の交流等を覚えている方も少なくなってしまうことを母は大変憂いておりました。



黒田家浜の町御別邸跡の碑（母：大野満壽子）

そこで、御別邸での出来事を書き残して、黒田家十五代当主黒田長久様をはじめ、奨学会でお世話になった方々にぜひお渡ししようと親子意気投合し、母が原稿を書き私がパソコンで清書したのち、加筆、訂正をしながら小冊子にまとめ「黒田別邸の四季」としてお世話になった皆様にお渡すことができました。

また、この手記が黒田奨学会の創立九十周年会報写真集へ掲載されましたことは、私どもに取りまして望外の喜びでございました。

掲載内容のご紹介として、目次の項目を列挙させていただきますと、1) お正月、2) 黒田賞、3) 黒田奨学会、4) 光雲神社大祭、5) 報古会、6) 福岡鳥の会、7) どんたく、8) 庭の手入れ、9) 虫干し、10) 宮様御宿泊と黒田様御西下、11) 日常の父の仕事、定例の集会等、12) 戦時態勢と御別邸の終焉、です。

奨学生の皆様も、大正から昭和初期までの福岡・博多の風習や黒田家御別邸の歴史等にご興味がある方は、奨学会事務局にご相談頂きバックナンバーをコピー等されてご一読頂ければ幸いです。

4) 北海道の地域医療に従事して

現在の私の勤務地、^{しべつちょう}標津町は北海道の東端、知床半島の根元に位置し、24kmの海峡を挟んだ先には、^{くなしりとう}近くて遠い北方領土の国後島が見える、漁業と酪農を主産業とする人口約5千人の町で、町名はアイヌ語の「サケのいるところ・大きな川」から由来しています。



標津病院外観



本町は東京都23区とほぼ同じ面積に医療機関は唯一標津病院のみという北海道でもトップクラスの医療過疎地であり、2009年に道東ドクターヘリの導入が始まりましたが、釧路市内のヘリ基地から半径100km以上の広大なエリアに一機体制での運用で、有視界飛行のため夜間や霧・強風・雪等の悪天候時には完全運休となるため利用できるかは運まかせであり、更にヘリでも釧路への往復は約1時間かかるため、現在も緊急手術や高度な治療処置が必要な救急患者のほとんどは救急車で片道2時間かけて釧路市内の病院へ搬送となる、まさに「北海道スケールの地域医療」の実践地域です。

私は昭和61年に出身の久留米大学呼吸器・神経・膠原病内科（旧第一内科）に入局し、大学院ではウイルス学教室と兼務で主にインフルエンザ呼吸器感染症の研究を行い、大学院卒業後は各出張病院で臨床経験を積んで大学病院へ戻ってきましたが、帰局後1年ほどしたときに「北海道の医療過疎地から応援の依頼が来ているが、行って見ないか」と上司に声を掛けられ、北海道に興味もあつたことより二つ返事で平成7年から8か月間勤務することになりました。

勤務当初の約30年前の標津病院は、内科医2名、外科医1名で通常の外来診療を行いながら、年間200台を軽く超える救急車に対応し、年間延べ4か月間の当直をこなすという、現在の「働き方改革」とは真逆の勤務状況でしたが、大学病院とは異なりすべての疾患の初期対応、あるいは警察から依頼のある検死等も行い医師としての「総合力」が試される職場でしたので大変やりがいもありました。

その後、一旦大学へ戻りましたが、それまで勤めていた院長先生が退職されることになり、一年後に今度は院長として勤務することになりましたが、「持続可能な地域医療」の実践のために、医師としての診療の他に病院経営や医療・介護・福祉が一体的に連携・運用できる新たな組織づくりからのスタートとなりました。

幸いなことに、医療・介護・福祉に必要なインフラとして住民の方々、行政や議会のご理解を頂き、施設としては「健康と福祉の村」として、標津病院・介護福祉センター・特別養護老人ホーム・訪問介護ステーション、デイサービスセンター等の主要施設がすべて渡り廊下でつながり、北海道の冬（厳冬期は最低マイナス20℃になります）も利用者の方が楽に移動ができ、利便性の向上や利用者の増加につながっています。

また、2020年1月の新型コロナウイルス感染症の国内発生初期には、私が呼吸器ウイルス感染症を専門にしていたこともあり、いち早くマスクや防護衣、消毒液などを準備し、感染外来を整備することで、その後の国内パンデミックや院内クラスター発生に備えることができ、さらに予備の資材を久留米大学の呼吸器内科へ提供することもできました。

更に、ある裁判ではインフルエンザウイルス感染に対して原告側の意見書作成などの依頼を受けており、大学院当時は自分の研究がどの程度社会の役に立つかなどは想像もしていませんでしたが、いずれも学び続ける事の大切さを痛感させられる出来事でした。

また、今までに久留米大学理事長永田見生先生、医学部長石竹達也主任教授、内科学講座星野友昭主任教授、外科学講座藤田文彦主任教授、地域医療連携講座富永正樹教授など、多数の先生方に来町して頂きました。



久留米大学理事長 永田見生先生(右から2人目)ご夫妻(町長室にて)



久留米大学医学部長 石竹達也教授(右端)地域医療連携講座 足達寿教授(左から2人目)

標津病院の視察等を経て久留米大学執行部から多大なご理解やご支援を頂けるようになり、毎年地域医療研修病院として医学部学生の研修を行うなど、現在では久留米大学の内科学および外科学講座の教育関連施設に認定され、5人の常勤医師や約80名のスタッフとともにチーム医療を実践することで、私も四半世紀の間奉職し続けることができいております。



医学部学生 地域医療研修



医学部学生 救急医療研修

日本語には「袖振り合うも多生の縁」という素敵な言葉があります。広辞苑によれば「道を歩くとき、知らない人と袖が触れ合う程度のことで単に偶然起こった出来事ではなく、遠い祖先からの縁の働きであり、すべての事象が深い宿縁に基づくもの」という意味だそうです。

私が、北海道の地域医療に従事する事になったきっかけや、今まで続けることができたことは単なる偶然や自分自身の努力だけではなく、今まで出会った多くの方々とのご縁の積み重ねの結果だと思っています。

奨学生の皆様も、それぞれに将来に対する不安や人生の大きな選択を迫られる事もあるかと思いますが、奨学生に選ばれ瑞藤会会員になった時点で、すでに皆さんの後ろには「ご縁の絆」で結ばれた多くの先達やサポーターの方々がいる事を思い出してください。

奨学生の皆様が、これから様々な分野で自信をもってご活躍されることが、奨学会が目指す「社会貢献」に繋がるものと確信しております。

それでは、黒田奨学会の益々のご発展と奨学生の皆様のご健闘を祈念いたしまして、終わりの言葉とさせていただきます。

目次

巻頭言

「袖振り合うも多生の縁」

北海道標津町国民健康保険 標津病院
病院長 大野 高義

トピックス

「日米学生会議に参加」

東京大学法学部4年 渡邊 蒼生 …… 1

「ドイツでの学会発表およびマインツ大学での共同研究を通して」

九州大学大学院工学府応用化学専攻 M 1年 中川 さくら … 4

海外研修報告

「ハーバード大学サマースクールで得たもの」

東京大学法学部第2類（法律プロフェッションコース）3年
小淵 朝陽 …… 5

「CanSat 打ち上げ実証実験」

東京大学工学部航空宇宙工学科3年 方倉 颯馬 …… 9

「タイ海外研修での学び」

九州大学医学部保健学科看護学専攻4年 新井 花奈 …… 13

行事報告

令和6年度 九州地区前期第1回研修会 …………… 17

令和6年度 九州地区前期第2回研修会 …………… 20

令和6年度 九州地区後期第1回研修会 …………… 23

令和6年度 関西地区研修会 …………… 26

黒田奨学会役員・評議員紹介

役員・評議員一覧 …………… 32

瑞藤会総会のご案内 …………… 34

編集後記 …………… 35

公益財団法人黒田奨学会に対する寄付継続のお願い

トピックス

東京大学4年の渡邊蒼生さんが、長い歴史を有する「日米学生会議」の日本側メンバーに選出され、第76回の同会議に参加されました。外交官を目指す渡邊さんにとって貴重で有意義な経験となったのではないのでしょうか。

また、九州大学大学院1年の中川さくらさんが、ドイツでの学会でポスター発表を行いポスター賞を受賞しました。研究分野の第一人者との交流や、ドイツの大学での共同研究の実施など実りの多い経験を積んだようです。

「日米学生会議に参加」

東京大学法学部4年
渡邊 蒼生

2024年8月、大学生生活最後の夏休みを費やし、日本側参加者の一人として第76回日米学生会議に参加しました。日米学生会議はアメリカの対日感情改善、日米相互の信頼回復を目指し「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年に発足した日本初の国際学生プログラムです。私は日米学生会議に参加するにあたり2つの目標を掲げました。1つ目は自らが将来外交官として日本外交に携わるにあたり、これまで経験したことのないアメリカを自分自身の目で見ることに。2つ目は日米学生会議の理念にもあるように日米の学生同士が心を通わせる深い人的交流も国と国との関係に影響を与える民間外交の一形態だと考え、日米関係に微力ながら貢献することです。まず、事前活動として分科会と呼ばれる小グループに分かれ、国際関係、福祉、社会運動など幅広いテーマを持つ分科会ごとに1週間に1回程度議論を積み重ねました。また専門家から話を聞くフィールドトリップを自分たちで企画したり、防衛大学校や韓国での研修を行ったりと約半年にわたって知識を深めてきました。アメリカ開催となった第76回日米学生会議では西海岸のロサンゼルスから始まり、南部のニューオーリンズ、首都である東海岸のワシントンD.C.と3週間かけてアメリカを西から東へ横断しました。今年度は日本とアメリカから合わせて63名の学生が参加し、英語での議論や各サイトの訪問先での学びを通じ、相互理解を深めました。以下では、サイトごとにこの夏の思い出を振り返りたいと思います。

最初の訪問地ロサンゼルスでは第2次世界大戦での日系人の強制収容を取り上げている全米日系アメリカ人博物館の見学、ハンティントン庭園での裏千家体験、LGBTQセンター訪問、ハリウッド観光、ドジャースタジアムでの野球観戦などを行いました。特に印象に残ったのは全米日系アメリ



リトルトーキョー



日系アメリカ人博物館